

# 「醜業婦」と「美人」のあいだでゆらぐ芸妓像

——東京大正博覧会と大正天皇即位礼をめぐる『廓清』の論説を中心に

林 葉 子

- 一 はじめに——「芸者万能の時代」
- 二 妻による芸妓の模倣
- 三 「美人」をめぐるアンビバレンス
- 四 おわりに——妻と芸妓の接近と対立

## 一 はじめに——「芸者万能の時代」

本稿は、東京大正博覧会（一九一四年）および大正天皇即位礼（「御大典」、一九一五年）の前後にメディアで報じられた芸妓のイメージと、芸妓に関わる廃娼運動雑誌の言説を分析し、同時期における「芸者（芸妓）」の社会的位置について再検討するものである。

廃娼運動団体・廓清会の機関誌『廓清』は、明治から大正初期にかけての時期を「芸者万能の時代」と呼ぶ<sup>1)</sup>。そ

して「日刊の新聞紙は慈善家や道徳家の写真は載せないが、芸者の写真は殆んど毎日其詳伝と共に連載される」と指摘している<sup>(2)</sup>。この指摘は誇張ではなく、新聞報道では実際、芸妓の写真やイラストが、連日、誌面を賑わせていた。後述する大正天皇の即位礼（「御大典」、一九一五年一月）においても、その報道の中で、皇族や旧華族の令嬢たち、大臣夫人たちとならんで、芸妓たちは準主役級の扱いであった。その誌面には、「御大典」に集う一般民衆についての詳しい報道はないが、「（上流階級の）夫人」、「令嬢」、および「芸妓」については、身につけた装飾品の色かたちから奉祝行列のルートまで、詳しく報じられている。

こうして当時の大衆の圧倒的な関心を集め、その華やかさを競った芸妓たちについての廃娼運動家の語りは、一様ではない。しかし芸妓に対しては、娼妓たちの、貧しさゆえに親に売られて廓に閉じ込められているといった悲惨なイメージはなく、「慈善家」である自分たちよりもむしろ「優遇せられ、重用せられ、可愛がられて居る」者たちだという共通認識があった<sup>(3)</sup>。その芸妓の優位性を支えるものは「美」であったから、廃娼派の人々の一部は、「美」の概念そのものの価値転換を図って、「美人」としての芸妓たちを、しばしば戦略的に「醜業婦」と呼んだのである。たとえば『廓清』では、次のように論じられている。

美人投票といへば、其被選者は醜業婦ではないか。美人絵葉書といへば醜業婦の絵葉書ではないか。日本の現代の辞書では美人の「美」の字と醜業婦の「醜」の字は、異字同意義の文字である<sup>(4)</sup>。

醜業婦の写真を美人写真など称して、醜の字と美の字の区別を知らない国民も他には余りあるまい<sup>(5)</sup>。

この「醜業婦」という差別表現は「芸娼妓」という言葉と結びついている。<sup>(6)</sup>「芸娼妓」とは「芸妓」と「娼妓」の両者をまとめて一語にしたもので、この語が暗に示しているのは「芸妓」も「娼妓」も同様に娼婦であり「醜業婦」であるという含意である。「芸妓」はたしかに、表向きはその芸を売る者たちであったが、しばしば同時に色を売る者でもあったということは、多くの史料から確認されている。しかし、その売春をしているという一つの共通点のみから「芸妓」も「娼妓」も結局は同じ存在だといわなければかりの「芸娼妓」という括りは粗雑で、その表現は「芸者万能の時代」の実態からは乖離していた。

ただし、廃娼運動の中でも「娼妓」と「芸妓」が論じ分けられることはあった。「娼妓」が同情すべき「罹災者」であり、救うべき「娘」であったのに対し、「芸妓」には、そうした憐れみの視線が向けられることは少なかった。代わりに向けられたのは、羨望のまなざしと激しい非難である。「芸妓」は、憐れみの対象にするような弱々しい存在ではなく、一時期は、その「美」によって力をふるう（権力者）だったからである。<sup>(7)</sup>伊藤博文、井上馨、山県有朋らのようにある政治家の妻が元芸妓であったケースは数多く知られているが、芸妓に魅了されたのは、政治家や上流階級ばかりではない。彼女たちの写真は絵はがきとなつて、戦地の兵士たちにまでも広く行き届き、階級を問わず人々の心をとらえたのである。<sup>(8)</sup>

そして廃娼派の人々の中にも、芸妓の「美」に高い価値を認める人は少なからず存在した。前述のような「美」を「醜」と読み替える価値転換の戦略ばかりが廃娼論の全てではなく、廃娼運動の参加者の中からも、芸妓の「美」をそのまま「美」として「長所」であることを認めた上で、妻たちこそ芸妓の「美」から学び、芸妓の「もてなし」の技能を自ら身につけて「美しく」なるべきだという声が数多く挙がった。「美」の排除ではなく、妻たちの「美」化によって、社会における芸妓の存在意義の消失を図るという方向性である。そして結果的には、後者が現実化した。

娼妓運動を推進する人々の間でも、娼妓運動参加者である男たちから、娼妓運動に参加する女たちに対し、女は美しくあるべきだと説かれることがあった。たとえば、廓清会の顧問である大隈重信は、『廓清』誌上で、次のように述べている。

新しい婦人も必要であるが彼ア云ふ運動は余り感服しないのである。婦人は矢張り極く静かに静かに婦人らしく、婦人の最も適したる処の感情、婦人の最も適當の同情、婦人の最も偉大なる同化力、而して一方には婦人の審美的な、美術的、優美なる―そこに婦人の本能的の任務がある。<sup>⑤</sup>

そもそも娼妓運動を推進する上での運動内の男女の役割は異なるべきだと強調する意見は、女性が娼妓運動に加わり始めた当初から存在した。<sup>⑩</sup> 本稿で論じる時期の『廓清』にも、男性の特長が「力」であるのに対し、女性は「美」だと論じられており、そうした「特性」を活かす性別分業の必要性が、娼妓派の一部の人々によって唱えられていた。『廓清』にも女性向けの化粧品広告が掲載されていることから明らかのように、女が「美」的であることは、むしろ推奨されていたのである。<sup>⑫</sup> このように、娼妓派の人々の中で「美」＝「婦人の本能的の任務」との考え方が根強く支持されてきたことは、「美人」としての芸妓についての議論が、芸妓排除一辺倒とはならず、複雑に多様化したことと結びついている。

以下、本稿では、その芸妓についての議論と、妻という存在をめぐる言説との関係に着目しながら、当時一般的に抱かれていたイメージとしての「美人」＝芸妓という認識がしだいに薄れていったことの社会的背景について考察したい。

## 二 妻による芸妓の模倣

『廓清』の創刊は一九一二年七月であるが、東京大正博覧会（一九一四年三月二〇日〜七月三十一日、以下、大正博覧会）が開催される頃までは、芸妓を、非難の対象としてではなく、むしろその長所から学んで模倣すべきものであるという主旨の論説も『廓清』誌上に見られた。廓清会の参加者の男女比は七・三であるが、『廓清』の記名記事における女性執筆者の割合は一割程度であり、男性によって執筆された記事が圧倒的に多い雑誌である。興味深いのは、その男女それぞれの記事の内容に共通してみられる特徴として、自己批判型の論説が少なくないという点である。男性執筆者は男性の買春行為等を批判的に論じる傾向があり、女性執筆者は女性の行動（妻としてのありかた等）を批判する傾向にある。むしろ、男性による女性批判や、女性による男性批判もみられるが、以下に紹介する芸妓に関する論説においても、自分と同一の性カテゴリー、そして主に同一の階層の人々を、自己批判的な形で論じる言説がみられた。

たとえば山脇房子は、その「妻」論の中で「須らく芸妓の長所に学べ」という小見出しを掲げながら、次のように、妻たちの容姿の醜さ、社交の能力の低さを非難している。

少しく家庭に這入つて年を経りました御婦人などといふものは容姿には些とも顧みず、髪も容もおどろおどろして恰も病後の患者か何かのやうではありませんか、あれでは到底夫の慰藉にならうとは思はれません。それからまた社交的接待といふやうなことも至つて下手で（中略）其の奥様が着物の着やうや其他の身嗜みが不恰好で二目と見られぬといふ

やうな工合ですから、自然と御主人も二度とは誘い出さず、矢張り芸妓といふ社交的辞令に長じたものを聘して来客の接待に充つるのでありますが（中略）男子の芸妓を招ぶことを批難するものは婦人自身の力の足らぬ処、芸妓が熾んに世間から歓迎せらるゝ間は婦人全体がまだ新時代の婦人の心得を解せぬ結果であつて我々の罪と思ふのが至当であります<sup>(14)</sup>

山脇によれば、芸妓がもてはやされる社会のありかたは、芸妓自身の罪でも、男たちの罪でもなく、美的な接待の仕方を知らない「我々の罪」である。夫たちは「渾身の力を揮ふて立たねば此の生存競争に打克つことが出来なくな」つており、「家庭で其元気を注入することの出来ないものは色々の方法をもつて之を講じやうと」するのだから、妻が美しくなければ、芸妓を必要とするのだという。「是はつまり社会の欠陥からも来ては居ますが、我国の今日の婦人が一体におきつちよで我儘で趣味が狹隘で容姿美的觀念に乏しいからであると私は断言いたします」と、山脇は、批判の矛先を「奥様」たちに向けるのである。<sup>(15)</sup>

河井道子もまた、中産階級の妻のありかたを問題の根源としてとらえ、夫を「もてなす」ために、妻たちは芸妓を模倣すべきだとして、次のように論じている。

私は日本の婦人方はモット夫の機嫌をとる事が上手になり、又之れをつとめる事が肝要だと思ひます（中略）世の中には女中にさして、事も、自分が手を出して、それで賢夫人だと思つてる人がありますが、私間違つた話だと思ひます。自分に大根<sup>マ</sup>をつけたたり、ちよいとばかりの裁縫をしたりするために肝心の夫の相手になるべき事が出来なくては実につまらない事でせう。仮令着物は他に縫ひに出しても夫の相手になる事をするのがほんとうだと思ひますので、この点は

芸者の上手なもてなし振を上品にやる必要があらうかと存じます<sup>(16)</sup>（傍点原文）

この河井の論説では、単に「芸者の上手なもてなし振」を模倣するだけでなく「上品にやる必要があらう」と表現しているところに、「素人」女性としての芸妓に対する優越意識が透けて見える。しかしその彼女の論説においても、妻たちに求められているのは、芸妓と全く異なる性質ではなく、芸妓と同様の「もてなし」役割である。たとえ家事は女中にまかせても、夫を「もてなす」ことに励むべきだと論じられていることからわかるように、ここで河井が語りかけているのは、女中を雇える階層の女たちである。

「奥様」「お嬢様」が芸妓よりも優れた存在であるというような意識に対する批判的な言説も『廓清』には掲載されている。西川文字は、芸妓＝私娼という認識をあらためて、その「芸」を認めるべきであるとしながら、次のように述べている。

一般に芸者とか娼妓とか云へば、一も二もなく締りのないもの、奥様お嬢様と云へば必らず堅いもの、との様に考へられて居ますが、必しもさうではないかもしれませぬ。芸妓などは多くの男に接し、何も承知して居て自由を選択することが出来ますから、これを其心に任しておけば、つまらない者の誘惑に陥るやうな事は少く、却って良家の娘さんなどの方が、男と交際した事もない位ですから誘惑に会えば、その人がどんな者であるかと問ふ余裕がなく直に其掌中に陥つてしまうものが多いのだと申します<sup>(17)</sup>

しかしこのように『廓清』の芸妓論において「奥様」批判が展開され、芸妓を真似ることを良しとし、芸妓と妻と

が比較され、両者の境界がいまいな形で表現されることが、靡娼派の一部の人々には、ある種の脅威としてとらえられた。内田魯庵は、もはや娼妓や遊廓に対しては人々の興味が薄れて「自滅の行程」にあるから放置していても大丈夫だが、靡娼運動としては、勢力を誇る芸妓についてこそ「攻究の余地がある」と、一九一二年の時点で論じている。男たちがみな芸妓のような女性を求め、女たちがみな芸妓化するのではないかという危惧を、内田は次のように表明している。

武藤三治といふ人は妻君を平生盛装さしておくさうである。そして芸妓買ひなぞをするのは妻君が世帯じみて、充分夫を慰藉する事が出来ぬからであるといつてゐる。そして氏は決して芸妓買ひ等しないさうである。それは結構な事である。が貧乏人にはそれも覚束ない。況んや心まで芸妓のやうになられば尚大變だらう<sup>(18)</sup>

羽仁もと子もまた、妻による芸妓の模倣について「奥さん自身が芸娼妓のやうな服装をなさつてそれで夫を引とめやうとなさる方もございますうですが、これは夫の趣味をいよいよ墮落させる不見識なやり方ではなからうかと思ひます<sup>(19)</sup>」と否定的に論じている。成瀬仁蔵にいたつては、きわめて強い調子で「芸妓は現社会に寄生するバチルスであると思ふ。此のバチルス杯は社会体の病源であつて、吾等は断じて之を根治しなければならぬ<sup>(20)</sup>」と、芸妓を全否定する姿勢を示した。

ただし、このような、芸妓に対する非難について、芸妓自身の反論も『廓清』には掲載されている。蝶子という芸妓の代筆記事の中では、次のように、芸妓批判に対する反批判が記されている。



そりゃ数多い芸者の中には、お客以上の質の悪いのも居ますさ（中略）併し、芸者をさうさせるやうにした、その根源はお客ぢやありませんか。自分たちが寄つてたかつて、芸者を墮落さして置いて、さうして芸者の改良だの、幽閉だのと勝手な熱を吐くのは、あんまり弱いものいぢめの手前勝手と云ふものぢやありませんかネ<sup>(21)</sup>

こうして『廓清』の中では、芸妓についての様々なとらえかたが示されながら、廓清会が取り組むべき最重要課題の一つとして「芸妓問題」が浮上していくのである。『廓清』では、一九一三年一〇月に「芸妓問題特集号」が組まれたが、同年一二月一三日には「芸妓問題大演説会」が開催されている。この「大演説会」の演説者は、益富政助、高島米峰、向軍事、矢島楯子、山室軍平、安部磯雄、宮田修であるが、その案内文に「現代に於ける最も華々しき私娼の一表現たる『芸妓』、害毒の劇甚なる戦慄するに堪へたる『芸妓』なるものに対して、本会は去九月宣戦の火蓋を切り、中毒昏睡せる社会の耳目を動せしめぬ」と書かれてあるように、芸妓は急速に「害毒」視され、警戒されるべき存在として否定的な意味合いを強めるのである。

芸妓が欠くべからざる存在になっていることに「紳士として」「堪へ難き侮辱を感じずには居られな」と論じるのは、加藤弘之<sup>(22)</sup>である。また女性側から芸妓排斥の姿勢を示したのは鳩山春子であり、この鳩山の批判は、当時の『廓清』の女性執筆者による芸妓批判記事の中では、最も差別性の強いものである。彼女は三回にわたる連載記事の中で芸妓批判を展開しているが、その連載が「芸妓の跋扈と家庭の婦人」というタイトルであったことにも示されているように、ここでもまた、芸妓と「家庭の婦人」（妻）との関係が、一つの重要な軸となっている。しかし彼女は、自らそのようなタイトルを設定して論じ始めていながら、芸妓と「家庭の婦人」とが同列に並べられ比較されること自体が、我慢ならない様子である。鳩山は、「家庭の婦人」たちが「御飯を焚く事と着物を縫ふ事より外に、男子を慰

「藉るといふ道を知らない」ことを認めつつも、『廓清』誌上においてさえ「家庭の婦人」たちに芸妓を模倣するよう呼びかけられているということは「家庭の婦人」に対する「侮辱」だといふのである。彼女は次のように述べる。

芸妓を見て自分の妻より美しいとは何といふ事ぞう（中略）其己れの妻と芸妓風情を比較するといふことは、余りに己れを侮辱し、己の妻を侮辱した事ではありませんか（中略）私は此の言葉には門外一步の処に悪魔が立つてゐるやうな感じを覚えます<sup>26</sup>

このように、妻による芸妓の模倣という一つの流行が「悪魔」という強烈な言葉で否定されているといふことは、裏を返せば、それほどの脅威を一部の人々に感じさせるほどに、芸妓たちの「美」的な「もてなし」の技術が、当時、確かな存在感を持っていたということである。この「美」を、「家庭の婦人」との関係においてどのようにとらえるべきかという点について、靡娼派の人々の間でも意見が分かれ、『廓清』においては、それぞれに異なる見解が並行して論じられていたのである。

### 三 「美人」をめぐるアンビバレンス

一九一三年末から一九一四年にかけての『廓清』において「芸妓問題」が焦点化されるようになった背景の一つに、一九一四年三月二〇日に開催された大正博がある。大正博は、開催当初は好評で「上野の山は人で埋まるほどの景気にて擦鉢山背後の出品入り口は雑踏目も当られずまるで芋を洗ふが如し」という賑わい様であり、第一日目だけで

入場者は一万五千人であった。<sup>(26)</sup> 開催期間中の入場者数の合計は、七四六万三千四百人である。<sup>(27)</sup> その博覧会の第一日目を報じる記事の中心には「芸者凡そ四五十名裾模様、琴洲の丸帯りうとせし上に紅色物の襟と紅前垂れの姿艶かしかりき」という表現があり、芸妓たちは、この大正博の主役的な位置を占めていた。

芸妓たちについては、博覧会新曲の題目や出演者、稽古の様子の写真、踊り順、出演時間についての案内、博覧会出演をめぐる芸者組合同士の争いなどが繰り返し新聞で報じられている。大正博における芸妓の主な活躍の場はパビリオンの一つとしての「演芸館」であるが、会場内で開かれる園遊会について報じた新聞記事の中でも、その内容のほとんどが芸者たちの服装や行動についての描写である。

この大正博前後の『廓清』における博覧会批判は、芸妓批判に止まらず、「美人島旅行館」（美人探検館）において「美人」が「陳列」され、「女看守」（コンパニオン）の「美人」たちの存在が注目を浴びていることにも向けられており、彼女たち「美人」がその「美」を売ることの是非が、議論の焦点となっていた。『廓清』は言う。

今や美人看守数百名を募集し、最も容姿の端麗なるものを選抜して之れに充て、更に就中優秀なる美人を盛装せしめて貴賓席に侍せしめんと伝えられ、新聞紙はそれ等の婦人の肖像履歴を掲げて読者の好心に投ぜんとしつつあり（中略）専ら美貌を条件とし美人博覧会の観あらしめ、以て観客を釣らんとするの手段を弄するに至つては、その醜、断じて許すべからず<sup>(28)</sup>

大正博は、まるで「美人博覧会」のようだという『廓清』の表現は、当時の新聞等を調べれば、大げさだとは思われない。実際、当時の報道には「美人」という言葉が、そこかしこに散りばめられている。ただし博覧会における「美人」

の展示および雇用は大正博が最初ではなく、すでに一九〇三年の第五回内国勸業博覧会では、今日「人類館」事件」として知られているように、琉球の廃業娼妓・芸妓（「琉球美人」）の手踊が「陳列」されていた。<sup>(28)</sup>「女看守」の採用も、この第五回内国勸業博覧会の時からであった。<sup>(29)</sup>そして大正博について報じる新聞記事においても、「美人」の展示は「南洋土人」（人を喰ふ人種が見世物にでるといふ南洋館<sup>(30)</sup>）の展示と並記されており、帝国主義の装置としての博覧会<sup>(31)</sup>において、「美人」への女性差別的な眼差し<sup>(32)</sup>が、「人種」問題とも交差しつつ存在したことが確認できる。

『廓清』において、特に批判の対象となったのは「美人島旅行館」である。ここでの「陳列」に自ら応募した女性のうち「女学生上りか女事務員上りと云つたやうな教育あるハイカラ婦人」の割合も少なくなかったようであるが、<sup>(33)</sup>展示内容は、「入口の火焰上の美人を筆頭に趣向の変つたのがかれこれ十幾種もあるが就中人目を引いたのは蛇体の美人と云ふパノラマ式に巧く光線を応用して物凄い背景を描き異様に扮装した美人と蛇体とを交るがわる出沒せしめ」というような、稚拙なものであった。新聞報道においてもその「幼稚」さが批判され、「実益などは勿論ゼロ、趣味も先づ零に近い<sup>(36)</sup>」と酷評されながらも、多くの入館者を集めていた。こうした展示の仕方を指して、ある『廓清』の記者は、半ば強引に次のように論じているのである。

到る処に美人百名募集の看板を掲げつつある等に徴すれば、如何なる方法にて、美人を陳列し又は給仕せしめんとするものなのかは知らねど、要するに美貌を以て人を呼ぶものなるが如し。換言すれば即ち美貌を売らしむるもの也。之れ実に奇怪千万の事に非ずや（中略）秋波を売り淫を鬻ぐと、美貌を売ると其差果して幾何ぞ<sup>(37)</sup>

このように「美貌を売ること」と「売淫」との類似性が強調されたことの背景としては、「美人島旅行館」の展示が、

実際、性的な意味合いを持っていたことを指摘しなければならない。大正博覧會当初は着物を着せられていた「美人島」の「美人」たちには、やがて「裸にして白襦袢を着せたり遠く見へる女を目近に見へるやうにしたりいろいろ変わった趣向を試みる」といった「改良」が施され、いつそう性的な色づけが加えられていった。<sup>(38)</sup>

しかし『廓清』において、こうした「美人島旅行館」の展示が批判的にとらえられることが、常に「美人」そのものの否定につながったわけではないという点にも、注意が必要である。三輪田元道の次のような表現からは、当時の廃娼運動において芸妓を論じることの困難は、「美人」の「美」の価値を社会的に位置づけることの困難であったことが理解されるのである。

大正博覧會に於ける刺激を与ふる物として、最も甚だしきは美人館である。西洋にても美人は可なり社会から尊敬される、美人其物は無論悪い事ではない、人種改良の上から見ても美しいのは結構な事である。けれども博覧會に於ける美人の利用は、何かと云へば醜劣なる感情を起さしめ、それによりて愚衆の山を築かんとするものであるから、人間を毒するの甚しきものである<sup>(39)</sup>

ここで三輪田は、性的な雰囲気のみなざる「美人島旅行館」に対して感情的な反発を示しながらも、自ら支持する人種改良論がネックとなつて「美人」の「美」の価値を論理的には否定しきれず、その自己矛盾ゆえにいつそう苛立ちを募らせて「美人」を「毒」視している。『廓清』において、芸妓を含む「美人」たちが、しばしば「毒」や「バチルス」といった強烈な表現で否定されるのは、「美人」の「美」が、廃娼派の人々にも否定しがたい価値を持つていたからである。小林丑三郎は『廓清』誌上で、やはり芸妓を「バチルス同様」と表現しているが、その理由として「世

間の人が娼妓の真似をするという事は絶えて聞かない処であるが、衣装其他頭から足の先迄、芸妓の流行を逐つてゐる、これも経済的に關係が甚だ大きい<sup>(40)</sup>ことを挙げてゐる。芸妓は多くの人々を魅了し、それゆゑに流行の発信地となつて経済を動かしており、おそらくそのことを論じる小林自身もその魅力に取り込まれそうな危うさを抱えていたからこそ、その不安を打ち消そうとして、かえつて激烈な否定表現を用いるのであろう。

前述の三輪田は「人種改良の上からみても美しいのは結構な事である」と述べたが、そのような優生思想と芸妓排斥の論理とを結びつけたのは、内ヶ崎作三郎である。内ヶ崎は、優生思想における「美人」肯定の論理と、代表的「美人」であるところの芸妓を排斥する論理とを、矛盾なく両立させるために、「美人」の概念を次のように分化した。

芸妓は、美しい、美しくとも肝心の聡明がない、何れもこれも間が抜けた顔をして居る。之れは何故であるか、心霊の修行をしないからだ。此頃は美容術といふものが流行る、令嬢などが顔ばかり綺麗に磨いて、折角美しくなつてもお気の毒な事には抜けて居る。美醜は仕方ないがインテリヂエンスが光り輝いてないならば駄目である<sup>(41)</sup>（傍点原文）

今日人間の美を批評する標準に『教育美』といふものがある（中略）女でも芸妓など美人だと云つたつて教育美がないから間が抜けた美人である。頭を使はない、彼等の手管は型で、我々が一時間も調べればすぐ分つてしまう型を皆やつてゐるにしか過ぎぬ<sup>(42)</sup>

こうして内ヶ崎は「インテリヂエンスが光り輝く」「教育美」という概念を新たに打ち出すことによつて、「美人」肯定と芸妓排斥を双方ともに正当化しようとしたのである。彼は「心靈」こそが重要であると論じ、他方で「顔」を

重視する「美容術」的な「美」の追求の仕方を否定したのだった。

しかし、このような内ヶ崎の論じ方が当時の世相と相容れないものであったことは、同時期の新聞における報道や広告のあり方を見れば一目瞭然である。大正博に引き続き、一九一五年一月、主に京都を舞台とする大正天皇の即位礼（「御大典」）のイベントが行われたが、大正博の時にも増して、このイベントに対する人々の関心は、女たちの美容と衣装に向いていた。当時の新聞では、芸妓や「貴婦人」や「令嬢」たちが「御大典」イベントへの参列の際に、どんな衣装を身にまとい、どのような髪型をし、どうやって化粧をしていたかということが事細かに繰り返し報じられており、それだけ、それらの点に対する読者の関心も高かったことを伺い知ることができる。そして大臣や公爵とその「夫人」が一緒に写る写真や、都踊りや鴨川踊りに出演する芸妓たちの写真が大きく掲載され、その「美しさ」が褒め称えられていた。廓清会顧問の大隈重信は「御大典」の当時、首相であったから、「大隈首相夫人」の動向も報じられて、「御年より五つも六つもお若くお美しく」と評されている。<sup>(43)</sup>

新聞においては、記事だけでなく「御大典」関連の化粧品広告の多さも特徴的である。「今度の御大典に参列なさる貴婦人方は何れも長時間奉仕の必要上、申合はされたやうに御園白粉を御召しになりました<sup>(44)</sup>」、「大学白粉は御大典の秋の化粧料として、貴族方を始め一般の家庭より名優名妓に到るまで上下おしなべて、今や満天下の流行品<sup>(45)</sup>というコピーとともに、「眞の美人」は化粧品によって作り出されるといふイメージが打ち出されている。こうした化粧品広告においては、「貴婦人」も「(家庭の) 婦人」も「名優名妓」も「女中」も同列に並記されており、その社会的立場がどうであれ、化粧品を用いさえすれば「美人」になれるかのようである。

この「御大典」イベントへの芸妓の出演をめぐることは、益富政助が、芸妓は「容貌の美貌（即ち客を釣る器）の程度に比例」して金銭が貸し付けられているから「普通の職業婦と見る事はどうしても出来ぬ」と述べて、再び「美貌

を売ること」＝「売淫」という説を唱えているが、「御大典」という、普段よりもいっそう社交の能力が問われる機会を前にして、「美」的な「もてなし」の能力を妻たちに求める意見もまた、『廓清』誌上で再び浮上しているのである。たとえば林歌子は、次のように述べている。

賤業婦とは芸妓なり（中略）これ芸妓の罪にあらずして、男子の伴侶たる婦人が自覚の足らざると、男子の敬愛を受くるに足るべき品性の修養につとめず、殊に交際場裏に立ち回る技量の乏しきに乗ずる男子の専横と、社会の欠陥を表示するものであります（傍点原文）<sup>(46)</sup>

これは一見、芸妓批判のように見えなくもないが、書かれてあることの主旨は「（家庭の）婦人」に対し、「品性の修養」および「交際場裏に立ち回る技量」を求める主張なのであって、林は、変わるべきは「（家庭の）婦人」だと論じているのである。浮田和民も同様に、次のように主張している。

一体これまではかう云ふ種類の婦人が公会の席に列つて来たのであるがそれは決して醜業婦が悪いのでもなければ男子が悪いのでもない。所謂これまでの奥さん風が悪いのである。凡て引込主義の婦人に対して場慣れした芸娼酌婦の類が出席するのは必然の要求と云はねばならぬ。故に今回もかかる婦人を排斥するとせば他にこれに変わるべき婦人がなければならぬ。勿論男子のみにては非常に殺風景であるから私は今後大いに婦人同伴でかかる席上にのぞまれん事を希望する。それには先づこれまでの所謂奥さん風を排して社交的になつて来なければならぬ。さうなれば何も彼等を非難せずとも自然に自滅せしむる事も出来やう。然しながら一般の婦人がこれまでのやうに低級であつては到底男子と提携して



行く事は不可能である。私は何よりも先づ今日の第一の急務として婦人の教育の普及を大いに望むものである<sup>(8)</sup>

浮田は芸妓を「醜業婦」と位置づけながらも、「悪い」のは、その芸妓たちでも男たちでもなく「輿さん風」であるという。妻たちが「引込主義」で「低級」で社交性に欠けることが、元凶だと言うのである。そして、もしも妻たちが社交性を身につけたなら、芸妓たちは「自然に自滅」すると述べている。だから浮田によれば、変えるべきは芸妓ではなく妻たちである。

ただし、浮田がこのように妻たちに変化を求めるとき、その方法として提案するのは「婦人の教育の普及」である。これは、さきに紹介した内ヶ崎の「教育美」論とも呼応しており、妻たちに求められる「美」は、芸妓の「美容術」的な「美」とは質的な差異化が図られている。内ヶ崎作三郎は「美」について、さらに次のように述べている。

女は実に人生を鼓吹するものである。而して女の要素は第一美でなければならぬ、女の美は実に男子を鼓吹する、美といふ事は勿論肉体のみの謂ではない〔中略〕芸妓が現今日本に四万何千人といふ大多数を算へ何十万の男を墮落せしめやうとして居るが、国家の大問題である。今日政治家は芸妓を弄びに行くと言ふより弄ばれに行く、併し女に依つて慰安を得ると云ふ事は強ち、悪い事ではない。グラットストンを偉大ならしめたのは妻である。〔中略〕婦人の力を借るのは決して悪い事ではないが、たゞ之を家庭に於て遣りたいのである。金を費つた上、病気を引受けたり実に馬鹿気た話ではあるまいか<sup>(9)</sup>

内ヶ崎の主張においては、芸妓の「美」と妻の「美」には質的な違いが求められつつも、「女の要素」として第一

に求められるのが「美」であることには変わりなく、その「美」によって男たちを「鼓吹」し「慰安」を与えることが女の「美」の重要な役割だとされている。ここで芸妓について「金を費つた上、病気を引受けたり」と論じられる時に想定されている「病氣」とは、「花柳病」すなわち性病のことであろう。つまり内ヶ崎は、芸妓に求められた性的な「慰安」を含め、肉体、精神の両面において男子を「慰安」することを「家庭に於て遣りたい」と論じているのである。

こうして芸妓の「慰安」役割が妻の役割へと置き換えられようとするとき、妻が芸妓と異なる点として妻の母役割に着目し、そのこととの関連において、日本人の「美人」観を根底から変えるべきだと論じたのは安部磯雄である。安部は、優生学的な遺伝論に言及しながら「美人」について、次のように論じている。

西洋では体格が強壯で、肉付が善く、色が紅く、歩行する時も力強く歩く人を美人として居るが、日本では、小造りな、色が紅くなく、却つて生白い、肩のこけた手足の細く血の氣のない様な、一寸見ても肺病患者で、<sup>34</sup>もありさうな者を以つて美人として居る。そして之を代表して居る者は所謂芸者である。日本の婦人が皆あの様になつたらどうであらうか。少し強い風が吹けば吹倒されさうな、如何にも無氣力で、且つヒステリー性に見える。あんな婦人の腹から出来た子は、必ず虚弱な、ヒステリー的な無氣力な者になる。青年男女は善く新しき理想に叶つた、遺伝の標準に叶つた者を選択する事が実に今日の緊要事であると共に、日本の美人の標準を今少し理論に叶つた処に置きたいと思ふ。<sup>34)</sup>

こうして、大正博と「御大典」の前後にクローズアップされた「芸妓問題」論を検証してみると、芸妓Ⅱ「美人」の「美」そのものを否定的に論じる人たちと、女の「美」の価値を称揚しながら「家庭婦人」の「美」化を推奨する

人たちとの見解の相違が平行線のまま、双方ともに『廓清』に掲載されていたことが確認できる。しかしどちらの立場に立つにせよ、『廓清』で芸妓が論じられるときには、その「美」をどのようにとらえるかという問いを軸として、妻という存在との相違が意識されつつ論じられていたという点において、両者ともに共通していたということができ。また、「美人」としての芸妓の役割を妻の役割に置き換えるべきだと論じる立場からは、芸妓＝「美人」としてとらえている従来の「美」の基準そのものを、優生学的な理想に沿って変化させるべきだと論じられるようになった。

#### 四 おわりに——妻と芸妓の接近と対立

大正博と「御大典」の前後の時期の『廓清』においては「芸妓問題」が浮上して、前述のように、美容術に励むような形での「美」の探究が否定的にとらえられることもあったが、廃娼運動と直接に関わりのない当時の一般庶民にとっては、大正博や「御大典」のイベントは、いっそう彼ら／彼女らを「美人」へと心理的に接近させ、「美」への欲求はかきたてられていった。

たとえば『都新聞』の人生相談欄である「相談の相談」というコーナーでは、田舎から博覧会見物のために東京に訪れた若い女性が、東京の女の「美はしい姿」を目にして、我が身と比較して、羨望のあまり煩悶する様子が紹介されている。それは、次のような内容であった。

私は信州の山奥から父に連れられて博覧会見物に上京した者でございます（中略）父は私を喜ばせ様として毎日此処彼処と連れ歩いて呉れますけれど、不図大鏡の前などで自分の姿を見る時、何となく世の中が厭になつて了ひます、何と

いへばい、か私共には口にいふ事さへ出来ぬ美はしい姿をして通る都の人の姿、私と同じ年位の娘などは花かと思はれるもの多いのに、それですのにさても私の此の姿、私はなぜ都会に生れなかつたのでせう、こんな事を申しますとさも浮薄の女のやうですけど、娘の時代は二度と来ません、其の若い楽しい時代をあんなに奇麗にして暮すのは確かに人間の幸福の一つです。<sup>(註)</sup>

こうした相談に対し、『都新聞』からの回答は「すべて人の尊むべきは其心の美であつて外形の美ではありません<sup>(註)</sup>」というものであつたが、その『都新聞』には毎日、「外形の美」のための消費を強く促す広告が大きく掲載されていたのだから、あまり説得力のある答えであつたとはいえないだろう。

「美」のための消費を促す広告は、単にその商品の効能をうたうだけでなく、しばしば脅迫めいた強引なコピーによつて、人々に美しくあれと呼びかけていた。たとえば「にきびとり」用の「美顔水」(桃谷順天館)の広告(図)には、次のように書かれている。

思つても恐しい!

若し私が美顔水を使はなかつたなら……?

若し今ほど美しくならなかつたなら……?

夫の身持は直らなかつたでせう!

私は今ごろ此家の人では無いでせう!

花子は継母の手に渡つてゐたでせう!

これについても婦人は美しくあり度いもの！

美顔水は是非使うべきもの！ と美しき夫人の思ひ出話！

美しくなるには必ず美顔水！<sup>(33)</sup>

こうした広告が放つメッセージは、「夫の身持」の悪さは、妻が美しくないせいだ、というものである。夫婦間の不和とその関係の破綻は、夫自身の責任ではなく、夫と性的関係を持った女性の責任でもなく、「美しく」ない「夫人」たちの問題であるかのようなのである。妻たちは、「美しく」ならなければ、夫に浮気されるだけでなく、家を追い出され、実子を奪われても仕方がないとされており、そのような不安が煽られる中で「美」のための消費へと誘導されているのである。

妻たちは、もはや母としての役割や家事の切り盛りだけでは十分ではなく、夫をその「美」によって満足させなければならぬと論じられるようになった。そしてこうした化粧品広告のメッセージにも現れている時代の空気は、娼運動雑誌で論じられた妻による芸妓の模倣という論点とも重なり合っているのである。

この時期の大衆的な芸妓観をあらわす象徴的な出来事は、「御大典」イベントにおける芸妓行列の「騷擾事件」(一九一五年一月一六日)である。これは「揉殺されんとした新橋芸妓連 馬場先附近の混雑」<sup>(34)</sup>「命だけは助かった芸妓連」<sup>(35)</sup>と報じられたもので、新橋芸妓の行列が、押し寄せる見物人の波にせき止められ、芸妓たちが服を引き裂かれたり溝へ突き落とされたりした事件であった。この芸妓行列は「御大典奉祝の催し中、第一の呼びもの」であり「美人デー」と称されていたが、熱狂する群集によって「滅茶々々」にされ、けが人も出たと報じられている。<sup>(36)</sup>この事件については、芸妓行列に反対する娼娼派の人々の仕事ではないかという噂がたち、一九一五年二月号の『廓清』に

は、この噂を否定する複数の論説が掲載されている。この「芸者行列騷擾事件」への廃娼派の人々の関与についての真偽は定かではないが、公式的な見解としては、廓清会や矯風会は芸妓行列に対する人々の暴力的な阻止行動を支持しなかった。

安部磯雄は「芸者行列騷擾事件」について、次のように分析している。

何故に群集は芸者の衣服を裂いたり引倒したり或は蹴たりしたのであらうか。単に一時の巫山戯としては余りに念が入り過ぎて居る様に思ふ。亦或人の想像して居るが如くに一部の人々の煽動によりて斯様なことが起つたとも考へられない。然らば如何にこれを説明すべきであるかといふに〔中略〕群集の中には芸者に対して何等かの嫉妬心を有するものが少なくないといふことである。〔中略〕更に或人々は芸者を以て富者の占有する玩弄物と見做し、富者の贅沢を憤慨すると同時に芸者を嫉視して居るのである。殊に婦人の一群は芸者が泣叫んで助を求むるを見て頗る痛快に感じ拍手したる物さへあると言はれて居る<sup>(8)</sup>。

安部が論じるように、大衆の「美人」＝芸妓に対する強烈な関心と嫉妬が、芸妓行列を見ようとして街中へ出向き、大挙して芸妓たちを取り囲みながら、きつかけさえ与えられれば彼女たちの衣服を引き裂き、突き倒す暴力行為へと人々を駆り立てたのであろう。その芸妓たちへの暴力に対して拍手喝采したのが「婦人の一群」であったことの背景には、女たちへ強迫的なまでに迫られた「美」化の要求があったのであり、妻と芸妓が比較され、両者の立場が接近しているためにこそ、激しい対立が引きおこされたのだと考えることができる。

廃娼運動の中で論じられた芸妓像を、単に蔑視という一側面においてのみとらえようとするならば、廃娼派の人々

**美 顔 水**

思つても 恐しい!

若し私や美顔水を  
使はなかつたらなら……  
若し今は美しく  
ならなかつたらなら……

夫の身持は  
直らなかつたでせう!

私は今ごろ  
此家の人では  
無いでせう!

花子は繼母の  
手に渡つてゐたでせう!

これにつけても  
婦人は美しくあり度いもの!

美顔水は是非使ふべきもの!  
美しき夫人の思ひ出話!

美しくなるには必ず美顔水!  
墨色を白くし、しめを細につやを出し、さび、吹、出物をば、  
かす、は、た、け、等、を、速、に、消、す、に、必、ず、に、び、び、り、美、顔、水、!!



美 顔 水 種 類 多 数  
館 天 順 桃 元 賣 發

のうち、少なからぬ人たちが「美人」を肯定的に論じていた事実を見落としてしまう。しかし、この廃娼運動における女たちへの「美」の要請こそが、きわめて重要な意味を持つていたのである。廃娼運動においては、たしかに一方で「美貌を売ること」を「売淫」と同一視することによって「美」を全否定する主張が唱えられることもあった。しかし他方で、女の価値はその「美」にこそあると論じられる場合も多く、しばしば「美人」としての芸妓の「もてなし」を模倣するよう、妻たちに奨励されていた。やがてその「美」の理想についての議論は優生学的な関心と結びつけられながら、廃娼運動において求められる妻たちの「美」と芸妓の「美」とは質的に異なるものだという議論が展開されていったが、その場合にも、妻の「美」の役割が、夫である男たちの「慰安」であるとされていた点にお

いて、芸妓と妻とは、類似する存在として位置づけられていたのである。そしてそのように男たちをめぐって女同士が競い合う関係性に置かれるからこそ、女たちの内に「美人」＝芸妓への激しい嫉妬の感情が生じて、暴力的な事件へと結びつくこともあったのである。

また、廃娼運動において妻に求められる「美」は、夫の芸妓買いや夫の浮気を防止するものとして位置づけられていた。つまり「美」とそこに含まれるエロスは、完全に排除されていたのではなくて、それらを夫婦という関係性の中へと水路づけ、閉じ込めようとする主張が見られたのである。先行研究が指摘するように、一九二〇年代には、厨川白村の『近代の恋愛観』（一九二二年）など、恋愛論がブームとなり、結婚生活の性的側面への人々の関心も高まっていった。<sup>(8)</sup> 本稿で論じた一九一〇年代前半の「美人」＝芸妓と妻との比較をめぐる議論は、やがてはこうした一九二〇年代以降に論じられる夫婦論にも影響を与えたはずであるが、その具体的な影響のあり方について論じることは今後の課題としたい。

## 注

(1) 芸妓こそが当時の「美人」であり大衆の憧れの的でもあったことについては、佐伯順子「写真集になった明治の女 美人写真集変遷史」ポラ文化研究所編『幕末明治美人帖 愛蔵版』所収、新人物往来社、二〇〇二年、参照。このほか、井上章一『美人コンテスト百年史 芸妓の時代から美少女まで』新潮社、一九九二年、「明治は徹頭徹尾、芸者の時代であった」と指摘した森まゆみ『大正美人伝』文春文庫、二〇〇三年、および田中優子『芸者と遊び―日本のサロン文化の盛衰』学研新書、二〇〇七年、参照。

(2) 『廓清会とは何ぞや（其一）放蕩禁止会』『廓清』第二巻第一号、一九二二年一月。本文中に『廓清』から引用するにあたっては、復刻版（不二出版、一九九五年）を使用した。

(3) 同前。



- (4) 同前。
- (5) 『廓清会とは何ぞや(其五) 風教改善会』『廓清』第二巻第五号、一九二二年五月。
- (6) 『醜業婦』という言葉は、廃娼運動史を論じる上で、きわめて重要なキーワードである。近年の先行研究において廃娼運動が批判的に言及される場合、ほとんど例外なく、廃娼運動家の『醜業婦』観、すなわち娼妓や芸妓を「醜業婦」と呼んだことの差別性が問題視されており、本稿もまた、この「醜業婦」という言葉の背後にある差別を問題としてとらえるものである。しかし先行研究においては、廃娼論の中で「醜業婦」という言葉がしばしば「美人」の対概念として用いられてきたことについて、着目されてこなかった。したがって本稿は、廃娼運動における「美人」論に焦点を当てることによつて、『醜業婦』観を新たな視角からとらえ、その内容についてより詳細に検証することを試みるものである。
- (7) 『廓清』には、上流階級出身の芸妓が少なくないことについての指摘と、自分たちよりも上に立つ者としての「貴婦人」および芸妓に対する反発とが記されている。たとえば井深花子は次のように述べる。「現時の貴婦人と申す方々を見ますと、そりや立派な方も、いくらも有るにはありますが、中には随分いかがかしい、醜業婦上りの人も少なくはございません。彼等は、徳もなく人格もないのに、只夫の地位、夫の名声に依つて貴婦人として人の上に立つてゐるのです」(同「娼妓の解放と相俟つ可き家庭の廓清」『廓清』第二巻第一号、一九二二年一月)。
- (8) 日露戦争開戦後「絵はがき」ブームが起きて、「美人絵はがき」もこの時期に大量に発行された(橋爪紳也『絵はがき一〇〇年 近代日本のビジュアル・メディア』朝日新聞社、二〇〇六年、細馬宏通『絵はがきの時代』青土社、二〇〇六年、参照)。この「美人絵はがき」の「美人」とは、主として芸妓のことを指していた。「美人絵はがき」と廃娼運動との関係については、拙稿「女たち／男たちの廃娼運動―日本における性の近代化とジェンダー」(大阪大学大学院文学研究科・博士學位論文、二〇〇八年三月)第四章、参照。
- (9) 大隈重信「一夫一婦は天地の公道」『廓清』第三巻第二一号、一九一三年一月。
- (10) 拙稿「廃娼運動への女性の参加と周縁化―群馬の廃娼請願から全国廃娼同盟会設立期まで―」『女性史学』第一七号、二〇〇七年。
- (11) 加藤直士「異性に対する理想」『廓清』第三巻第一二号、一九一三年一月。
- (12) 一例を挙げると、『廓清』第二巻五号(一九二二年五月)に掲載された「クラブ白粉」の広告(『クラブ新聞』)には、次のような記述がある。「男は男らしく女は女らしくと云ふらしく主義は何事にも發揮して欲しいものである(中略)京都の女は国粹的美を以て千有余年の史上を飾り居候(中略)クラブ白粉クラブ洗粉の流行して以来京美人は平和な鴨川の都に

生れたらしき幽婉な一種いふべからざる床しきと生氣とを添へ来り候依て京美人は今後幾千年の美人史を飾ること、喜び居り申候」(傍点原文)。

- (13) この点については、拙稿「文明化と〈男らしさ〉の再構築―一九一〇年代の『廓清』に見る性欲論」荻野美穂編『性』の分割線―近・現代日本のジェンダーと身体』青弓社、二〇〇九年、参照。
- (14) 山脇房子「夫の慰藉者としての妻」『廓清』第二巻第四号、一九二二年四月。
- (15) 同前。
- (16) 河井道子「家庭を清新ならしめよ」『廓清』第三巻第一〇号、一九一三年一〇月。
- (17) 西川文子「芸妓も自覚せしめよ」『廓清』第三巻第一〇号、一九一三年一〇月。
- (18) 内田魯庵「趣味の変遷と遊廓」『廓清』第二巻第九号、一九一二年九月。
- (19) 羽仁もと子「家庭の純潔と趣味の向上」『廓清』第三巻第四号、一九一三年四月。
- (20) 成瀬仁蔵「社会のバチルス」『廓清』第三巻第一〇号、一九一三年一〇月。
- (21) 蝶子「有髻の芸者顔色ありや」『廓清』第三巻第二号、一九一三年二月。
- (22) 「芸妓問題大演説会」『廓清』第三巻第一号、一九一三年一月。
- (23) 加藤弘之「宴会改良論」『廓清』第四巻第一号、一九一四年一月。
- (24) 鳩山春子「芸妓の跋扈と家庭の婦人(二)」『廓清』第四巻第二号、一九一四年二月。
- (25) 同「芸妓の跋扈と家庭の婦人(三)」『廓清』第四巻第三号、一九一四年三月。
- (26) 「第一日の入場者」『都新聞』一九一四年三月二日。
- (27) 橋爪紳也『日本の博覧会―寺下勅コレクシヨ』平凡社、二〇〇五年、六三頁。
- (28) 「廓清時言 大正博の美人看守募集」『廓清』第四巻第三号、一九一四年三月。
- (29) 演劇「人類館」上映を実現させた会編『人類館 封印された扉』アットワークス、二〇〇五年。
- (30) 前掲『日本の博覧会―寺下勅コレクシヨ』五一頁。
- (31) 「大正博覧会は愈々明日」『都新聞』一九一四年三月一九日。
- (32) 「美人島の女王(芸者の踊り順)」『都新聞』一九一四年三月二日。博覧会会場内のみならず、その外側にある食堂街についての記述においても、芸妓へのまなざしと「土人」へのまなざしは密接に絡み合っている。たとえば、新聞記事の中には、次のような表現がある。「生蕃餅の店には台湾土人の芸者七人を縮緬の振り袖を着た京都の舞妓が二人出て給仕をする。

そして土人の方二人が餅をつく」（『都新聞』一九一四年三月九日）。

(33) 吉見俊哉『博覧会の政治学 まなごしの近代』中公新書、一九九二年、参照。

(34) 「美人」を「品定め」の対象として見る視線は、新聞記事の中にもあらわれている。たとえば「博覧会の女品定（女の看守と女の給仕）」（『都新聞』一九一四年四月五日）と題された記事の中では、女たちの容貌について「若いから綺麗ですね、綺麗といふよりは寧ろ可愛らしい、けれども、これぞといふ別嬪にお目にか、らないのが残念ですね、何うも倅の嫁には落第ですヨ」といった形で、品評するかのような記述がある。

(35) 前掲「美人島の女王（芸者の踊り順）」。

(36) 坪谷水哉「大正博の印象（三）」『都新聞』一九一四年四月一四日。

(37) 「廓清時言 美人島の秘密探検とは何ぞ」『廓清』第四卷第三号、一九一四年三月。

(38) 「美人島の改良」『都新聞』一九一四年四月二八日。

(39) 三輪田元道「教育及道徳上よりせる大正博覧会論」『廓清』第四卷第四号、一九一四年四月。

(40) 小林丑三郎「経済界の攪乱者」『廓清』第四卷第四号、一九一四年四月。

(41) 内ヶ崎作三郎「生れざる者に対する義務」『廓清』第四卷第七号、一九一四年七月。

(42) 同「文明とは何ぞや」『廓清』第五卷第八号、一九一五年九月。

(43) 「大饗に召された夫人」『大阪朝日新聞』一九一五年一月一七日。

(44) 「御園白粉」広告『大阪朝日新聞』一九一五年一月六日。

(45) 「大学白粉」広告『大阪朝日新聞』一九一五年一月一〇日。

(46) 益富政助「御大典と芸妓問題」『廓清』第五卷第九・一〇号、一九一五年一〇月。

(47) 林歌子「御大典記念事業解説」『廓清』第五卷第九・一〇号、一九一五年一〇月。

(48) 浮田和民「婦人問題の解決と女子教育の普及」『廓清』第五卷第九・一〇号、一九一五年一〇月。

(49) 内ヶ崎作三郎「人生の鼓吹者」『廓清』第六卷第三号、一九一六年三月。

(50) 安部磯雄「結婚の目的と遺伝」『廓清』第六卷第八号、一九一六年八月。

(51) 「相談の相談」『都新聞』一九一四年四月六日。

(52) 同前。

(53) 「美顔水」広告『都新聞』一九一四年三月一四日。

(54) 「花の如き芸妓行列」『万朝報』一九一五年一月一七日。

(55) 「命だけは助つた芸妓連」『万朝報』一九一五年一月一七日。

(56) 前掲「花の如き芸妓行列」。

(57) 前掲「命だけは助つた芸妓連」。

(58) 安部磯雄「芸者行列騷擾事件 敢て当局の注意を促す」『廓清』第五卷第一二号、一九一五年二月。

(59) 菅野聡美は「性欲、結婚、恋愛を切り離して個別に考察していたのが明治期であり、大正期の課題は、これら相互の関連づけだったといえるのではないだろうか」と指摘している(同『消費される恋愛論 大正知識人と性』青弓社、二〇〇一年、

一〇九頁)。このほか、川村邦光『性家族の誕生 セクシュアリティの近代』ちくま学芸文庫、二〇〇四年、参照。

(60) 「夫婦生活のエロス化」については、赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房、一九九九年、および萩野美穂『家族計画』への道 近代日本の生殖をめぐる政治』岩波書店、二〇〇八年、参照。「良人に愛される妻」については、木村涼子「近代家族における『主婦』と『良人』の甘い生活―戦前の大衆婦人雑誌の誌面分析から―」『女性学研究』一三三号、二〇〇六年三月、参照。